

英語と日本語の受身表現

姫 田 慎 也

Expressions of English and Japanese Passives

Shinya HIMEDA

【要旨】

英語では二重目的語構文を第3文型で前置詞toを使って与格移動変形するGive型動詞と、前置詞forを使って与格移動変形するBuy型動詞があり、動詞によって前置詞の種類を使い分ける必要があるが、その分類は日本語の動詞にも英語との共通点と違いが存在する。Give型動詞の二重目的語構文と間接目的語を主語にした第一受動態とは、同様の意味を持つ日本語の能動文及び受身文に共通点が見られ、日本語特有の間接受身文のようであっても対応する能動文が存在する。Buy型動詞では間接目的語を主語にした受動態が文法制約により非文になるのに対し、日本語では受身文が可能ではあるものの、元の能動文とは異なった意味を示す受身文の存在が確認されるため、英語および日本語双方において能動文と受身文との対応関係がないという共通点が確認できる。

日本語では「*彼に私に自転車を壊した。」という元となる能動文が存在しないものの「私は彼に自転車を壊された。」という日本語特有の間接受身文が存在するが、英語ではbe動詞を用いて"*I was broken my bike by him." と表現することができない。

Give型動詞とBuy型動詞との分類、及び間接受身文の存在は動作主、間接目的語、直接目的語との関係に起因すると想定される。

1. はじめに

日本語と英語は間接目的語を主語に受身文に変形することができる言語である。例えば、「彼女は彼に部屋の鍵を渡した。」という能動文を、間接目的語を主語に「彼は彼女に部屋の鍵を渡された。」と変形でき、同様に "She gave him a room key." を "He was given a room key by her." と間接目的語を主語に受動態に変形できる。しかし、「*彼に私に自転車を壊した。」という元となる能動文が存在しないものの「私は彼に自転車を壊された。」という受身文が存在する。一方、英語では能動文として "*He broke me my bike." は非文となり、be動詞を用い

て "I was broken my bike by him." と受動態で表現することもできない。

英語では二重目的語構文を第3文型で "I gave a pretty hat to her." のように前置詞toを使って与格移動変形する動詞もあれば、"I bought a pretty hat for her." のように前置詞forを使って与格移動変形する動詞もあり、動詞によって前置詞の種類を使い分ける必要があるが、その分類は日本語の動詞にも共通点が存在するのだろうか。本稿では日本語と英語の二重目的語構文の受身表現を中心に考察したい。

なお、本稿の文型の分類はOnions (1932) に基づき、SVOA型の文型も第3文型とする。

2. 二項他動詞を使った受動態

2.1. 第4文型

英語の二項他動詞の受動態において、(1) b – (3) b のように間接目的語が主語になる第一受動態が一般的であるが、(1) c – (3) c のように直接目的語を主語にした第二受動態も存在する (グリーンバウム, S・クーク, R 1995 : 631)。

- (1) a. Someone gave John a book.
b. John was given a book. [第一受動態]
c. A book was given John. [第二受動態]

- (2) a. Someone sent her a letter.
b. She was sent a letter. [第一受動態]
c. A letter was sent her. [第二受動態]

- (3) a. Someone showed the boy the photo.
b. The boy was shown the photo. [第一受動態]
c. The photo was shown the boy. [第二受動態]

ただし、直接目的語を主語とした受動態では第二受動態よりも前置詞を用いた方が一般的である (グリーンバウム, S・クーク, R 1995 : 631-632)。

- (4) a. A book was given to John.
b. A letter was sent to her.
c. The photo was shown to the boy.

2.2. 第3文型

「動詞+直接目的語+前置詞つき間接目的語」からなる与格構文においては直接目的語を主語に受動態にできるが、間接目的語を主語に受動態にはできない (畠山 2011 : 130)。前置詞つき間接目的語、いわゆる付加詞を文頭に持ってきてても同様である。

- (5) a. Tom introduced John to Nancy.
 b. John was introduced to Nancy by Tom.
 c. *Nancy was introduced John to by Tom.
 d. *To Nancy was introduced John by Tom.
- (6) a. He sent a letter to her.
 b. A letter was sent to her by him.
 c. *She was sent a letter to by him.
 d. *To her was sent a letter.
- (7) a. Nancy showed the photo to the boy.
 b. The photo was shown to the boy by Nancy.
 c. *The boy was shown the photo to by Nancy.
 d. *To the boy was shown the photo.

2.3. 有生物か無生物か

英語における二重目的語構文の特徴の1つとして、多くの場合、間接目的語が有生物、直接目的語が無生物である（グリーンバウム, S・クック, R 1995 : 631）。

- (8) a. Tom gave John a book.
 b. I sent her a letter.
 c. Allen is going to buy his sister a hat.
 d. Nancy cooks her father breakfast.

ただし、直接目的語が無生物であっても代名詞では容認されない。

- (9) a. *Tom gave John it.
 b. *I sent her this.
 c. *Allen is going to buy his sister that.
 d. *Nancy cooks her father that.

3. 間接受身文

3.1. 直接受身と間接受身

寺村（1982）では日本語の受身を「直接受身」と「間接受身」の2つに区分している。直接受身文は(10), (11)のように動作主が行った行為を目的格が直接的に受け、構文的には「XがYニ～サレル」が「YがXヲ（ニ）～スル」という能動表現を持つ。

(直接受身文)

- (10) a. 太郎が花子に叩かれた。
b. 花子が太郎を叩いた。
- (11) a. 少年が少女にからかわれた。
b. 少女が少年をからかった。

(12)や(13)のように英語の第3文型の能動文と受身文との関係は、日本語の能動文と直接受身文との関係と共通する。

- (12) a. Tom's bike was stolen by John.
b. トムの自転車がジョンに盗まれた。
c. John stole Tom's bike.
d. ジョンがトムの自転車を盗んだ。
- (13) a. Her TV was broken by Jim.
b. 彼女のテレビがジムに壊された。
c. Jim broke her TV.
d. ジムが彼女のテレビを壊した。

一方、間接受身文は主語が受ける影響が間接的であり、構文的に「XがYニ(Zヲ)～サレル」が「YがXヲ(ニ)(Zヲ)～スル」という能動表現を持たない(寺村 1982 : 215)。

また、間接受身文では動作主が行った行為を主語が間接的に受け、被害を蒙ったという意味が含まれることが多い(許 2004 : 25)。

(14) a - (16) a は間接受身文の例であるが、(14) b - (16) b のように対応する能動文を作ることができない。

- (14) a. 太郎が花子に頭を叩かれた。
b. *花子が太郎に頭を叩いた。
- (15) a. 私は店長に時給を下げられた。
b. *店長は私に時給を下げた。
- (16) a. 彼女は誰かに宝石を盗まれた。
b. *誰かが彼女に宝石を盗んだ。

間接受身文には自動詞文の受身文も存在する。自動詞が目的語を取らないため、目的語がある能動文のほとんどが非文となり、自動詞文の受身文の主語が能動文の目的語とはならず(17) a - (19) a

は(17) b – (19) bに対応しない。

(間接受身文)

- (17) a. 私は妻に死なれた。
b. *妻は私に死んだ。
- (18) a. 授業中、その若い教師は学生たちに寝られた。
b. *授業中、学生たちはその若い教師に寝た。
- (19) a. 健二は妹に泣かれた。
b. ?妹は健二に泣いた。(健二のことで泣くという意味なら可。)

3.2. 「～によって」を用いた受身文

間接受身文は主語が動作主によって迷惑を蒙った意味合いが強いにも関わらず、「～によって」を用いた(20) b – (25) bの受身文は他動詞文でも自動詞文でも容認し難い。

(他動詞文)

- (20) a. 太郎が花子に頭を叩かれた。
b. *太郎が花子によって頭を叩かれた。
- (21) a. 私は店長に時給を下げられた。
b. *私は店長によって時給を下げられた。
- (22) a. 彼女は誰かに宝石を盗まれた。
b. *彼女は誰かによって宝石を盗まれた。

(自動詞文)

- (23) a. 私は妻に死なれた。
b. *私は妻によって死なれた。
- (24) a. 授業中、その若い教師は学生たちに寝られた。
b. *授業中、その若い教師は学生たちによって寝られた。
- (25) a. 健二は妹に泣かれた。
b. *健二は妹によって泣かれた。

3.3. 間接受身文の英語訳

直接受身文とは異なり、間接受身文を英語の受動態で表現するのは困難である。また、日本語

と同様、英語においても間接受身文の元となる意味を表す能動文も容認できない。

- (26) a. *Tom was stolen his bike by John.
b. トムはジョンに（自分の）自転車を盗まれた。
c. *John stole Tom his bike.
d. *ジョンはトムに（トムの）自転車を盗んだ。
- (27) a. *I was eaten my bread by him.
b. 私は彼に（自分の）パンを食べられた。
c. *He ate me my bread.
d. *彼は私に（私の）パンを食べた。
- (28) a. *I was killed my parents by them.
b. 私は彼らに（自分の）両親を殺された。
c. *They killed me my parents.
d. *彼らは私に（私の）両親を殺した。

3.4. Have受動態・Get受動態

間接受身文を英語に訳す場合、Have受動態・Get受動態にすれば可能な文となる。Have受動態・Get受動態も日本語の間接受身文と同様、元となるはずの能動文が存在しないため、日本語との共通点が見られる。

- (29) a. Tom had (got) his bike stolen by John.
b. トムはジョンに（自分の）自転車を盗まれた。
c. *John stole Tom his bike.
d. *ジョンはトムに（トムの）自転車を盗んだ。
- (30) a. I had (got) my bread eaten by him.
b. 私は彼に（自分の）パンを食べられた。
c. *He ate me my bread.
d. *彼は私に（私の）パンを食べた。
- (31) a. I had (got) my parent killed by them.
b. 私は彼らに（自分の）両親を殺された。
c. *They killed me my parents.
d. *彼らは私に（私の）両親を殺した。

3.5. 自動詞の受動態

英語は日本語と異なり目的語を取らない自動詞はほとんど受動態にできないため、間接受身文を受動態で表現することができない。

- (32) a. 私は妻に死なれた。
b. *I was died by my wife.
- (33) a. 授業中、その若い教師は学生たちに寝られた。
b. *In the class, the young teacher was slept by students.
- (34) a. 健二は妹に泣かれた。
b. *Kenji was cried by his sister.

3.5. 直接受身文

(35) a – (37) a は「X が Y に (Z ヲ) ~サレル」という構文であるため表面上は間接受身文に見えるが、(35) b – (37) b で「Y が X ヲ (ニ) (Z ヲ) ~スル」という対応する能動文が存在するため、間接受身文とは著しく異なる。

(直接受身文)

- (35) a. 私は彼に写真を見せられた。
b. 彼は私に写真を見せた。
- (36) a. その子供は彼女に手紙を渡された。
b. 彼女はその子に手紙を渡した。
- (37) a. アレンは母親に昔話を聞かされた。
b. 母親はアレンに昔話を聞かせた。

(間接受身文)

- (38) a. 私は彼に私の車を壊された。
b. ?私は彼に彼の車を壊された。
- (39) a. 私は彼に私の娘のコートを汚された。
b. ?私は彼に彼の娘のコートを汚された。
- (40) a. 私は彼に私の高校時代の成績表を見られた。
b. ?私は彼に彼の高校時代の成績表を見られた。

(38) a – (40) a の間接受身文と (35) – (37) のような能動文が存在する受身文との違いは受身文での主語（間接目的語）と直接目的語との関係が考えられる。(38) a – (40) a の間接受身文では直接目的語と主語が所有等によって関係が深い。一方、(38) b – (40) b のように主語と直接目的語とが所有等の関わりがない場合、解釈が困難である。

(35) a – (37) a では主語（間接目的語）と直接目的語の関係は本来無関係である。また、(35) – (37) での動詞は二重目的語をとる動詞でもある点も間接受身文との違いだと想定される。

(35) a – (37) a は (35) b – (37) b のような対応する能動文が存在するために直接受身文と考えられる。このタイプの直接受身文は英語でも表現できる例が多く、次章でさらに分析を行う。

4. Give型動詞とBuy型動詞

4.1. Give型動詞における日本語と英語の二重目的語構文の共通点と相違点

間接受身文のような構文 (41) a – (45) a でありながら対応する能動文 (41) b – (45) b が存在する受身文が存在するが、このタイプの受身文のもうひとつの特徴は英語の第4文型、つまり二重目的語構文との類似点である。

日本語の二重目的語構文の受身文は「XがYに（Zヲ）～サレル」という間接受身文と同じような受身文でありながら、「YがXに（ニ）（Zヲ）～スル」という対応する能動文が存在する。英語においても間接目的語を主語とした受身文（第一受動態）は、第4文型の能動文と対応する。これらの動詞は (46) のように 'to' 与格移動変形によって第3文型とすることもできる、いわゆる Give型動詞である。日本語においても英語においても Give型動詞であれば、二重目的語構文での対応する能動文と受身文が見られる。

- (41) a. 彼女はトムに花を贈った。
b. 母は彼女に花を贈られた。
c. She gave Tom a flower.
d. Tom was given a flower by her.
- (42) a. 彼女は彼に絵を見せた。
b. 私は彼に絵を見せられた。
c. He showed me a painting.
d. I was shown a painting by him.
- (43) a. トムはナンシーに手紙を送った。
b. ナンシーはトムに手紙を送られた。
c. Tom sent Nancy a letter.
d. Nancy was sent a letter by Tom.

- (44) a. 彼は彼女に真実を伝えた。
 b. 彼女は彼に真実を伝えられた。
 c. He told her the truth.
 d. She was told the truth by him.
- (45) a. 彼女は私にその書類を渡した。
 b. 私は彼女にその書類を渡された。
 c. She passed me the document.
 d. I was passed the document by her.
- (46) a. I gave a flower to my mother.
 b. She showed a painting to me.
 c. Tom sent a letter to Nancy.
 d. He told the truth to her.
 e. She passed the document to me.

4.2. Buy型動詞における日本語と英語の二重目的語構文の共通点と相違点

(47)のように第4文型が間接目的語の 'for' 与格移動変形によって第3文型となる時に使われる動詞がいわゆるBuy型動詞である。

Buy型動詞の第4文型での間接目的語を主語に受動文に変形した第一受動態を荒木・安井(1992)、デクラーク(1994)、安井(1996)等では原則として容認していないものの、小西(1985)においては容認する例が存在する。本稿におけるBuy型動詞における受動態の容認の可否については小西(1985)に基づくものとする。

小西(1985)では、(48)c - (52)cのようにBuy型動詞の二重目的語構文は容認されるが、(49)d, (50)d, (52)dの間接目的語を主語にした第一受動態は容認できない。また、日本語では、(48)a - (52)aのBuy型動詞と同じような意味を持つ日本語の二重目的語構文の存在は認められるが、間接目的語を主語に受身文になった(48)b - (52)bとは意味が異なり、対応関係とはならない。このためto与格構文に相応する日本語の能動文での間接目的語を主語に受身文に変形することはできるが、for与格構文に相応する日本語文での同様の変形は困難である。

(48)b - (52)bは「XがYに(Zヲ)〜サレル」という受身文の形であるが、間接受身文のように能動文が存在しない訳ではない。しかし、Give型動詞の二重目的語構文とは明らかに異なり、(48)a - (52)aと(48)b - (52)bとは意味的に対応する関係にはならない。(48)b - (52)bのように迷惑を被った意味であるため間接受身文のように見えるが、能動文の(48)b - (52)bとは意味的に対応しないこのようなBuy型動詞の二重目的語構文の受身文を姫田(2012: 58)では「擬似間接受身文」としている。Buy型動詞であれば、日本語においては二重目的語構文では能動文と受身文が対応関係とはならず、英語においては受身文が非文となる可能性があるため、Buy型動詞の二重目的語構文の能動文と受身文が対応関係とならないという意味においては日本語と英語に共通点が見られる。

- (47) a. He bought a hat for his sister.
b. He made a bookshelf for me.
c. Tom cooked dinner for John.
d. She chose shoes for me.
e. The children sang a song for her.
- (48) a. 彼は妹に帽子を買った。
b. ?妹は帽子を彼に買われた。(=妹が買おうとしていた帽子を彼に買われてしまった。)
c. He bought his sister a hat.
d. His sister was bought a hat by him. (小西 (1985 : 192) では可。)
- (49) a. 彼は私に本棚を作った。
b. ?私は本棚を彼に作られた。(=私自身で本棚を作ろうとしていたが彼に作られてしまった。)
c. He made me a bookshelf.
d. *I was made a bookshelf by him. (小西 (1985 : 916) においても非文。)
- (50) a. トムはジョンに夕食を料理した。
b. ?ジョンは夕食をトムに料理された。(=ジョンは夕食を料理するつもりだったがトムに料理されてしまった。)
c. Tom cooked John dinner.
d. *John was cooked dinner by Tom. (小西(1985 : 313) においても非文。)
- (51) a. 彼女は私にガレージを作った。
b. ?私はガレージを彼女に作られた。(=私は自分でガレージを作るつもりだったが彼女に作られてしまった。)
c. She built me a garage.
d. I was built a garage by her. (小西 (1985 : 175) では可。)
- (52) a. 彼女は子供たちに絵本を見つけた。
b. ?子供たちは彼女に絵本を見つけれられた。(=子供たちは自分たちで絵本を見つけるつもりだったが彼女に見つけられてしまった。)
c. She found the children a picture book.
d. *The children was found a picture book by her. (小西 (1985 : 564-565) においても非文。)

4.3. 直接目的語を主語にした第二受動態

小西（1985）では一部の動詞の直接目的語を主語にした第二受動態の存在を認めているが、第二受動態よりも前置詞を用いた(53)e – (62)eの方が一般的である（グリーンバウム, S・クワーク, R 1995 : 631）。英語においては多くの場合、Give型動詞、Buy型動詞に関わらず、能動文と、直接目的語を主語にした受身文との意味的な対応関係が見られる。

それに対して日本語においては、Give型動詞では動作主の助詞として「～から」を使用すれば対応する受身にできるが、Buy型動詞ではできない。

(Give型動詞)

- (53) a. 彼女はトムに花を与えた。
b. 花が彼女からトムに与えられた。
c. She gave Tom a flower.
d. A flower was given Tom by her.
e. A flower was given to Tom by her.
- (54) a. 彼女は彼に絵を見せた。
b. 絵が彼女から彼に見せられた。
c. She showed him a painting.
d. A painting was shown him by her.
e. A painting was shown to him by her.
- (55) a. トムはナンシーに手紙を送った。
b. 手紙がトムからナンシーに送られた。
c. Tom sent Nancy a letter.
d. A letter was sent Nancy by Tom.
e. A letter was sent to Nancy by Tom.
- (56) a. 彼は私にそのニュースを伝えた。
b. そのニュースは彼から私に伝えられた。
c. He told me that news.
d. The news was told me by him.
e. The news was told to me by him.
- (57) a. 彼女は私にその書類を渡した。
b. その書類は彼女から私に渡された。
c. She passed me the document.
d. The document was passed me by her.
e. The document was passed to me by her.

(Buy型動詞)

- (58) a. 彼は妹に帽子を買った。
b. *帽子が彼から妹に買われた。
c. He bought his sister a hat.
d. *A hat was bought his sister by him. (小西 (1985 : 192) においても非文。)
e. A hat was bought for his sister by him.
- (59) a. 彼は私に本棚を作った。
b. *本棚が彼から私に作られた。
c. He made me a bookshelf.
d. *A bookshelf was made me by him. (小西 (1985 : 916) においても非文。)
e. A bookshelf was made for me by him.
- (60) a. トムはジョンに夕食を料理した。
b. *夕食はトムからジョンに料理された。
c. Tom cooked John dinner.
d. *Dinner was cooked John by Tom. (小西 (1985 : 313) においても非文。)
e. Dinner was cooked for John by Tom.
- (61) a. 彼女は私にガレージを作った。
b. *ガレージが彼女から私に作られた。
c. She built me a garage.
d. *A garage was built me by her. (小西 (1985 : 175) においても非文。)
e. A garage was built for me by her.
- (62) a. 彼女は子供たちに絵本を見つけた。
b. *絵本が彼女から子供たちに見つけられた。
c. She found the children a picture book.
d. *A picture book was found the children by her. (小西 (1985 : 564-565) においても非文。)
e. A picture book was found for the children by her.

4.4. その他の動詞

小西 (1985) では前述の分類方法に当てはまらないto及びforを伴う動詞について述べられている。

4.4.1 call

第3文型では付加詞にforを伴うBuy型動詞であるが、第5文型と誤解される可能性があるた

め普通、第二受動態では用いられない（小西1985：200）。

- (63) a. ? A taxi was called Tom. (トムという名のタクシーなのかトムのために呼ばれたタクシーなのか不明瞭。)
b. A taxi was called for Tom.

4.4.2 forgive, lead, save

第4文型で用いることができるが、付加詞にfor及びtoを伴って第3文型に移動できないことがある（小西1985：607, 836, 1317）。

- (64) a. I will forgive him his rudeness → *I will forgive his rudeness to (for) him.
b. You led her a dog's life. → *You led a dog's life to (for) her.
c. It will save you money. → * It will save money to (for) you.

4.4.3 bring, sell

第3文型では付加詞にto及びforのどちらも伴い、場所か利益関係によって使い分けられる（小西1985：166, 1359）。

- (65) a. John brought a book to Tom. (「ジョンはトム（のところ）に本を持ってきた。」)
b. John brought a book for Tom. (「ジョンはトム（のため）に本を持ってきた。」)
(66) a. John sold the notebook to Tom. (「ジョンはトムにノートブックを売った。」)
b. John sold the notebook for Tom. (「ジョンはトムのためにノートブックを売った。」)

4.4.4 teach

第4文型か第3文型かによって意味が異なる（小西1985：1601）。

- (67) a. Professor. Davis taught Nancy Japanese literature. (ナンシーが日本文学を修得したことを含意)
b. Professor. Davis taught Japanese literature to Nancy. (ナンシーが日本文学の学生であったことしか含まない)

5. 結語

英語のbe動詞を用いた受動態では対応する能動文が存在しない日本語の間接受身文を表すことができないため、間接受身文は日本語特有の構文だと言える。また、間接受身文は主語と直接目的語との関係が動作主と直接目的語との関係よりもはるかに深い。

英語の第3文型におけるto与格動詞であるGive型動詞とfor与格動詞であるBuy型動詞とに動

詞を分類し、分析を行なった結果、Give型動詞の二重目的語構文と間接目的語を主語にした第一受動態とは、同様の意味を持つ日本語の能動文及び受身文に共通点が見られ、一見、間接受身文のようであっても対応する能動文が存在する。一方でBuy型動詞では間接目的語を主語にした受動態が文法制約により非文になるのに対し、日本語では受身文が可能ではあるものの、元の能動文とは異なった意味を示す受身文の存在が確認されるため、英語および日本語双方において能動文と受身文との対応関係がないという共通点を確認できる。Give型動詞が比較的自由に能動文を受動文に変形できるのに対し、Buy型動詞は様々な制限の中で受動文に変形する必要がある。共起する前置詞の役割が制限の一因と想定されるので、前置詞の持つ特徴をさらに分析しなければならない。

また、たとえ文法的には問題なくとも容認できるか否かは談話レベルにおいて分析が必要であり、文法での範疇を超えたさらなる考察が求められる。

参考文献

- 荒木一雄・安井 稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』三省堂, 東京.
- Beth, Levin (1993) *English Verb Classes and Alternations*, The University of Chicago Press, Chicago.
- デクラーク, R. (安井稔訳) (1994) 『現代英文法総論』開拓社, 東京.
- グリーンバウム, S・クック, R (池上嘉彦・他訳) (1995) 『現代英語文法〈大学編〉新版』紀伊国屋書店, 東京.
- 畠山雄二 (編) (2011) 『大学で教える英文法』くろしお出版, 東京.
- 姫田慎也 (2012) 「日本語と英語における受動文」『龍谷大学国際センター研究年報』第21号 (龍谷大学国際センター). 51-64.
- Horn, L.R. (1989) *A Natural History of Negation*, Chicago University Press, Chicago.
- 許 明子 (2004) 『日本語と韓国語の受身文の対照研究』(シリーズ言語学と言語教育第3巻) ひつじ書房, 東京.
- 池上嘉彦 (1996) 『③英語の意味』(テイクオフ英語学シリーズ) 大修館書店, 東京.
- 小谷晋一郎 (2000) 『英語の語彙』(龍谷叢書VIII) 龍谷学会, 京都.
- 小西友七 (編) (1985) 『英語基本動詞辞典』研究社, 東京.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』大修館書店, 東京.
- 西垣内泰介・石居康男 (2003) 『英語から日本語を見る』(英語学モノグラフシリーズ13) 研究社, 東京.
- Onions, C. T. (1932) *An Advanced English Syntax*, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., London.
- 太田 朗・池谷 彰・村田勇三郎 (1972) 『文法論 I』(英語学大系3) 大修館書店, 東京.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 斎藤武生・原口庄輔・鈴木英一 (編) (1995) 『英文法への誘い』(開拓社叢書2) 開拓社, 東京.
- Shibatani, Masashi and Sandra A. Thompson, ed. (1996) *Grammatical Constructions*, Oxford University Press, Oxford.
- 高見健一・久野 暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』研究社, 東京.
- 竹沢幸一・Whitman, John (1998) 『格と語順と統語構造』(日英語比較選書9) 研究社出版, 東京.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版, 東京.
- 安井 稔 (編) (1996) 『コンサイス英文法辞典』三省堂, 東京.
- 米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』(英語学モノグラフシリーズ17) 研究社, 東京.
- 鷲尾龍一・三原健一 (1997) 『ヴォイスとアスペクト』(日英語比較選書7) 研究社, 東京.